

アーカイブの重要性を語る渡辺教授



同研究所が本学大学史資料室や東京神田神保町映像ライオンで開かれた。研究報告に先立ち、第1部では元千代田区役所職員でNPO法人神田学会理事の小藤田正夫氏が「神保町150年—写真でたどる靖国通り界隈の変遷—」と題して講演。江戸時代から現代に至る神保町の変遷を、豊富な図版とともに紹介し、土地や建物を借りて

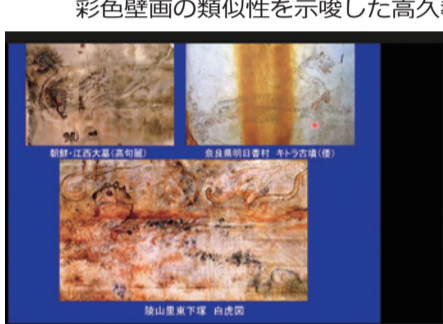
いる。11月5日には鶏肉のサステナブルな取り組みに大きな関心を寄せている。11月5日には鶏肉のサステナブルな取り組みに大きな関心を寄せている。11月5日には鶏肉のサステナブルな取り組みに大きな関心を寄せている。

商学研究所(岩尾詠一 画祭と連携して2019年)から取り組んできた地域情報発信のプラットフォーム「神田神保町アーカイブ」に関する研究成果が報告された。

第2部では、初めに商学研究科博士後期課程の山崎万穂さんがデモペー

### 地域情報の活用法を探る

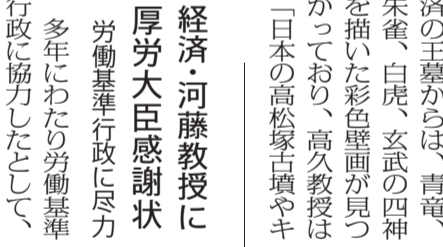
#### 商学研究所 公開シンポジウム



「いつ、どこで、どのようなことがあったのか」という複層的な情報を取得・発信できる」と話す。22年3月の公開を目指しており、地域研究や地域マーケティングなど多用途の活用が期待される。

いる人たちが協同組合を作り、地主と協力してまちづくりを行った」と解説した。

開発中のデモ画面



「厚葬墓の展開—」をテーマに講演。歴史ファン約170人が聴講した。厚葬墓とは、

大規模で多数の副葬品を持つなど、厚い埋葬が行われている墳墓を指す。講座では、中国大陸と朝鮮半島における王墓の成り立ちを概観し、東アジアに展開した厚葬墓文化について論じた。

中国の厚葬墓文化は朝鮮半島に伝わり、各国で特徴的な王墓が造られるようになる。高句麗や百済の王墓からは、青竜、朱雀、白虎、玄武の四神を描いた彩色壁画が見つかった。高久教授は「日本の高松塚古墳やキ

### 東アジア地域の王墓の変遷解説

#### 公開講座「歴史を紐とく」

ホームカミングデー2021 オンライン特別展示

## 専大スポーツの軌跡

オンライン展 開催中

専大体育会100周年を記念したオンライン展示「専大スポーツの軌跡」を本学ホームページで開催している。100年もの歴史を誇る専大スポーツの歩みを、写真や資料などで紹介。映像も多数公開しており、なかでも1933年のボクシング部の活躍を記録したものは、本学に残る最も古い貴重な映像である。また、専大スポーツが輩出した専大オリンピック選手の活躍や、東京オリンピック1964をスタッフとして支えた校友も紹介している。

## 神原教授 阪本教授 専大松戸高で出張授業



# “食”から見た経済学を講義

### 高大連携

商学部の神原理教授と阪本将英教授が、専修大学松戸高校(千葉県松戸市、五味光校長)3年生の専大クラスで出張授業を行った。

授業名は「社会科学入門」、単元「フライドチキンから私たちの食生活を考える—システムを思考で考える—」で、フライドチキンを通して自然環境・社会・経済システムについて学習して

高校生に語りかける 神原教授

## 大学院公開講座 初の3部構成で実施

大学院に所属する教員らが専門分野について分かりやすく解説する大学院公開講座が、10月8日から12月3日まで開講された。今年度は文学、法学、経済学の3研究科による初の3部構成で、オンラインで連続9回実施した。

PART1は「コミュニケーションと会話」をテーマに文学研究科が担当。コーパス言語学、音声学、社会言語学を専門とする3教員が、最新の研究について話した。初回は丸山岳彦教授が「コーパス言語学から見る会話の構造—会話を構成する諸要素—」と題して講演。日常会話の分析手法として、会話分析とコーパス言語学の二つを紹介した。

PART2は法学研究科による「米中対立と国際関係」。米・中・日の政治外交を専門とする3教員が、現在の米中関係について解説した。

経済学研究科が担当したPART3のテーマは「DXが変える産業・企業」。ポストコロナ時代を視野に入れたデジタル・トランスフォーメーション(DX)によって産業・企業がどのように変わったかに焦点を当て、3人の論者が講演した。

## 知の発信



科研費採択研究から 阪本 将英

アスベスト(石綿)はかつて建材として大量に使用されましたが、重篤な健康被害を引き起こすことが明らかになりました。発症するまで20~40年かかることから「静かな時限爆弾」と言われます。

被害は建設業や工場で石綿を扱っていた労働者だけに限りません。工場の周辺住民にも及んでいることが明らかになり、2006年、石綿健康被害救済制度が創設されました。これは石綿と健康被害の因果関係の特定が難しい被害者を救済するための制度です。しかしいくつかの問題があり、今回の研究では多角的な視点から改正の方向性について提起していきます。

最大の課題は給付水準の低さです。労災などに比べ、被害者本人や家族、遺族(包括的被害者)の生活を補償するには不

## 石綿被害者の立場から考える補償のあり方

十分です。中皮腫や肺がんなど石綿関連の疾患は症状が重く、苦しみは計り知れません。病気になる原因が、労働なのか居住なのかによって補償格差が生じることは許されません。21年5月に建設石綿訴訟の最高裁判決で国と企業の責任が認められました。とても大きな一歩ですが、これだけで段階とせず、給付格差を解消する仕組みを整える必要があります。

さらに、身体的、精神的負担を軽減し、生きがいを見つけれられるような支援体制を備えた補償制度ができて初めて救済につながるかと考えています。この研究では被害者の立場に立ち、QOL(生活の質)を高める仕組みまで提案します。

石綿を含む公害は経済成長のもう一つの側面です。国や企業の発展のために、労働者や生活者にさまざまなものが押し付けられました。もし被害者が被害を受けていなかったらどういった生活を送っていたら、といった想像力が重要です。例えば現代でも、正社員と非正規雇用では同じ仕事にもかかわらず格差が生じています。さまざまな格差を是正し、どのようにして持続可能な社会を構築していくのか、多面的な見方を持つてほしいということを講義で語り続けていきます。

(さかもと・まさひで) 京都大学大学院経済学研究科博士課程修了。博士(経済学)。専門は環境経済学。著書に「アジア・オセアニアにおける災害・経営リスクのマネジメント」(共著)など。